

あ・ぽい台湾

安倍

美香

● 理事
ソニーマーケティング(株)



私が初めて台湾を訪れたのは二〇〇七年の春、台北101で行われる家電の技術展示会に赴いた時でした。その頃、私は社内で「日本のおもてなし」を伝える接遇研修を海外スタッフに実施しており、南米、北米、中国を経て最後に訪れたのが台湾だったのです。

相手をまるで親戚か親友と一緒にいるかのような気持ちにさせ、別れた後にも温かい余韻が残る台湾の人々の接し方に、なぜこの土地の人達はこのような事が自然にできるのだろうと、「日本流のおもてなし」を伝えるはずだった私が研修初日が終わる頃には、すっかり台湾流のおもてなしに心を奪われていたのです。

私には幼い頃より母から繰り返し聞いていた台湾のエピソードがあります。私の曾祖父が台湾で警察官をしていた事、それに纏わる「あ・

ぽい」という優しい響きの言葉についてです。

母の生家は東北にあり、隠れキリシタンを匿った隠し部屋が昭和頃に見えられた旧い家でしたが、いずれその十八代当主となるべき曾祖父が、なぜ台湾に渡り警察官をすることになったのでしょうか。今となっては当時の事を知る者はおらず、数枚の写真が残っているのみです。

いくつかの話から推察すると、曾祖父は大正五年から十年ほど高雄にいたようです。残された写真では、立派な制服を着て腰にサーベルを佩いた壮年にさしかかろうとしている曾祖父が真っ直ぐにこちらを見つめています。

ある日、母が「台湾の言葉で『ありがとう』ってなんていうのでしょうか」と聞くと、曾祖父は少し笑いをこらえたような顔をして「『あ・ぽい』だ」と答えたといっています。

からかわれたのかしらと母は思いました。いま台湾の現地語を調べてみると、辛うじて「あらい」という言葉がでています。

今となつては、これは曾祖父のジョークだったのか、あるいは記憶違いだったのか、それは知る由もありません。しかし、「あ・ぼい」という、この何とも優しい響きと少し茶目つ気を感じさせる語感はいかにも台湾人が微笑みながら言いそうな言葉ではないでしょうか。

凛々しい制服姿の曾祖父、「あ・ぼい」という謎の言葉、かつて台湾と日本が共に生きた時代があったこと……。以来、いつも台湾の事は私の心にありましたが、恥ずかしい事に私はまだ台湾の事を何も知りませんでした。その後、導かれるように、曾祖父の足跡を探して私と母は高雄を訪ねる事になります。

ある年の二月の末、私達は高雄の警察署を訪ねました。曾祖父が百年ほど前にこのあたりで警察官として勤務していた事、高雄がどのような場所か知りたくてこの街に来たことなどを母が拙い言葉で説明すると、集まってきた数人の

お巡りさん達は「おお、そうですか」といった様子で深く頷いてくれました。

しかし、お互いにそれ以上込み入った会話を続ける事は難しく、どうぞ、と差し出された白湯を飲み干した後は、双方ニコニコと微笑み合うことしかできず、それではそろそろ……と腰を上げると、高雄の全景が描かれた壁の前に案内され、立派な制服に身を包んだ二人のお巡りさんが母と私の両脇にすつと立ち、記念写真を撮ってくださいました。

今、曾祖父と話す事ができたら私は何を報告するでしょう。

曾祖父さま、震災の際に台湾の方々が多額の義捐金を送ってくださいました。今、台湾と日本はかつてないほどに重要な関係を築こうとしています。私も微力ながらお役にたてたらと思っています。

台湾の青い空を見上げると、いつも曾祖父の声が聞こえてきます。

あ・ぼい 台湾。

あ・ぼい 美香ちゃん。